うめく「生」―8

アフリカ・赤道直下から

「私と妹を置いて なぜ逃げたの？」

夢の中でも母は後ろ姿

母が逃げた。9歳の女児トゥムクンデちゃんには、その理由がどうしても分からない。私はどうなるの。妹はだれが世話するの。お母さん、私が嫌いになったの？ トゥムクンデちゃんは毎日、そう考えて、悲しくてたまらない。

ルワンダ東部、タンザニアとの国境・キブンゴ。孤児院「ハウス・オブ・ジョイ（喜びの家）」を訪れた。走り寄ってきた子どもたちは元気いっぱいだ。1人を抱くと、周りから「ランジェ（私も）、ランジェ」の掛け声。その集団の後ろに、少女が1人たたずんでいた。名を聞くと、「トゥムクンデ」と小さな声でつぶやいた。「これ、妹。1歳」。トゥムクンデちゃんが背負ったニヨンフィーテちゃんは、あどけない顔をして眠っていた。

トゥムクンデちゃんは6歳の時、内戦に巻き込まれた。両親と一緒に、タンザニアの難民キャンプに逃げ、プラスチックシートでつくった小屋で暮らした。6畳ほどの部屋が一つだけ。遊ぶところもない。薬も不足していた。配給で食いつないだ。ただ、生きているだけだった。

昨年12月、帰国することになった。夜、数十万人の列にまじって歩いた。母は、生まれたばかりのニヨンフィーテちゃんをおぶっていた。国境を越えた時、みんなが一斉に走りだした。ゲリラ兵がやって来たのだ。

両親の後について、トゥムクンデちゃんも走った。母は突然、背中のニヨンフィーテちゃんを下ろした。道端に置いたまま、母は逃げた。トゥムクンデちゃんは妹を抱き上げた。「お母さん」。大声で叫んだが、その後ろ姿はやみに消えた。父はとっくに消えている。どうして私を見放すの。わけが分からない。ニヨンフィーテちゃんは、泣き続けている……。途切れ途切れに、トゥムクンデちゃんは話した。

「喜びの家」にはこれまで、孤児約400人が来た。半分は、消息が判明した親や親類に引き取られた。この幼い姉妹の引き取り手は、ない。

「お母さんのことは、毎晩、夢で見る。でも、いつも、逃げていくところなの」

トゥムクンデちゃんの心の傷は、深い。

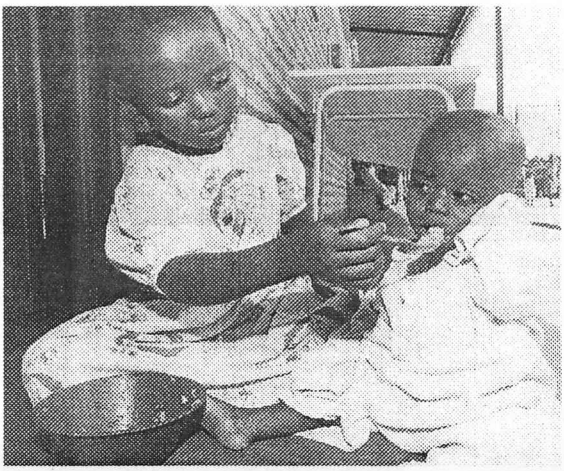
＝おわり

文　小倉　孝保
写真　玉置　勝巳

◇

今年のキャンペーンでは国連機関などへの寄付に加え、ウガンダの子どもたちをエイズから救うためのプロジェクトをサポートします。救援金は下記へ郵便振替か現金書留で送金いただくか、直接ご持参下さい。

〒530―51　大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係（郵便振替・00970―9―12891）



母に会える日を待ちながら、妹ニヨンフィーテちゃん（右）の世話をするトゥムクンデちゃん＝ルワンダ・キブンゴの孤児院で